

氏名	ウエ スギ スミ ヒト 上 杉 清 仁
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第150号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉ランベール（1610－1696）における歌唱装飾法
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 准教授（音楽学部） 野々下 由香里
（副査）	〃 教授（ 〃 ） 鈴木 雅 明
（ 〃 ）	〃 〃（ 〃 ） 片 山 千佳子
（ 〃 ）	〃 准教授（ 〃 ） テシュネ・ローラン

（論文内容の要旨）

フランスにおける17世紀は、多くの作曲家、歌手、声楽教師が「美しく歌う事 *bien chanter*」また「歌唱芸術 *L'art de bien chanter*」に関して、それぞれの見解を述べ、また考察するようになった時代であった。したがって、17世紀の声楽曲を分析するためには、当時の音楽学者、声楽教師が残した歌唱に関する著書を精読し、歌唱がどのように扱われ、またどのように歌唱されることが望まれていたかを考察する必要がある。

フランス・バロックにおける歌唱において、最も重要であると考えられるものの一つが、「歌唱装飾法」である。特に17世紀においてはドゥーブル *double*と言われる手法が、声楽作品の作曲技法として多く取り上げられている。この技法は、サンプル *simple*と呼ばれる元歌を、「歌唱装飾法」で巧みに変奏するものである。ドゥーブルは、当時の多くの歌唱教師達が彼らの著書で定義している「歌唱装飾」によって作られている。

この技法の名手の一人として挙げられるのが、ランベール Michel Lambert（1610－1696）である。彼は生涯にわたって、300曲を超えるエールを残している。彼のエールは、上述したサンプル *simple*とドゥーブル *double*の2節からなるもので、その後者において妙技的な歌唱装飾が施されている。宗教曲の分野においても、同様の技法を用いてグレゴリオ聖歌に華麗な装飾を施した《ルソン・ド・テネブル》を2組作曲している。ランベールはこのドゥーブルの技法において最も優れている作曲家であり、彼のドゥーブルを研究する事で、当時の装飾法の扱いを深く考察することができる。ただし彼は、自分の装飾法を「歌唱教本」の形としては残さなかった。

本論文では、従来十分に研究されてこなかったランベールの装飾法を、当時の歌唱教本の記述を参考に分析し、演奏上問題となる点を考察し、具体的にどのように演奏すべきか提言を行った。

第一章ではランベールの生涯とその作品について考察し、ランベールの生きた人生と、どのような作品が残されているかを考察した。

第二章では、ランベールの生きた時代に書かれた、6人の理論家、声楽教師の著書における「歌唱装飾法」に関する項目を訳出した。その結果、17世紀の「歌唱装飾」にはどのようなものがあり、それがどのような役割を持っているのかを、一つ一つの装飾法に関して詳しく考察した。

第三章では、第二章で考察した「歌唱装飾法」を、ランベールの作品の楽曲分析を通じて、作品の中でどのように使われているかを考察した。ドゥーブルの名手であったランベールの作品においては、理論家達はその著書で定義している「歌唱装飾法」が巧みに使われており、特にルラードの使用が、ランベールのドゥーブルの特長であるということがわかった。

第四章では、サンプルしかないランベールの作品をドゥーブル化することで、ドゥーブルの作曲がどうあるべきか、また装飾法をどのように使用すればより流麗な旋律を作る事ができるのかを考察した。また、聖金曜日のための第三ルソンにおける通奏低音と歌唱声部の拍の違いを明らかにし、歌唱声部をどのように通奏低音に合わせるべきかを示した楽譜を作成することによって、そのままでは演奏する事が難しいランベールの楽譜を、筆者の解釈に基づいて演奏へ反映できるようにした。

17世紀の歌唱は、「歌唱装飾法」によって美しく装飾され、演奏されるということがその大きな特徴であると言える。つまり、作曲家が記した音を、いかにして独自のセンスで装飾を施すことができるかということが、歌い手の力量を示すうえで大きな比重を占めていた時代であったと言っても過言ではない。書かれた楽譜をそのまま、なんの装飾も施さないで演奏したならば、歌い手自身の力量のなさを露見させることになったであろう。また一方で、むやみやたらに装飾を施し、歌詞や旋律の持っている内容を阻害してしまうような装飾を施した歌い手は、作曲家はもとより聴衆をも満足させる事はできなかったであろう。

本論文で扱ってきた理論家・声楽教師は、そのことを諫めるために、歌い手のセンスを磨くことを推奨し、その上で装飾法を的確に使いこなせるようにとの願いから、多くの歌唱教本を残すことになったのである。そして、ランベールのような類まれなドゥーブルの名手によって「歌唱装飾法」が実践され、後の作曲家、歌手達に多大な影響を与える事となったのである。

フランスにおいてこれほど多くの歌唱教則本が書かれたのは、この時代の他には考えることはできない。このことからわかるように、17世紀のフランスは、「歌う」ということに大なる美学を求めている時代であると考えられるのである。そして何より「歌唱装飾」こそ、当時の歌唱をよりきらびやかにさせる、その美学の中心的存在だったのである。

#### (総合審査結果の要旨)

本論文は、フランス・バロック期のランベールMichel Lambert (1610-1696)の歌唱法、とくに「ドゥーブル」(サンプルと呼ばれた元歌に対し巧みな装飾を伴った繰り返し部分を指す)における装飾法について研究し、17世紀フランスの歌唱表現の妙を解き明かし実践につなげようとしたものである。

ランベールは、エール・ド・クールにおけるドゥーブルの名手として知られていたが、自身の手による歌唱教則本は記していない。そこで申請者は、ランベールの生涯や作品について概説したのち、メルセヌからラフィラルにいたる17世紀を生きた6人の歌唱装飾法の記述を「抄訳」の形で紹介し、楽曲分析しながら装飾法との関係を明らかにしようとした。文章は全体的に注が少なく6人が著した個々の装飾法を紹介することはできたが、歌唱表現の妙を解き明かすには説得力がいまひとつであった。最終章では申請者自身がドゥーブルを施したものが提示されたが、やはり論文の本旨であるランベール作品の装飾を、和声や歌詞との関係においてさらに考察を進めるべきであった。しかし難解なドゥーブルを伴ったランベールの作品に注目し、その優雅で流麗な美しさを紹介し演奏法を研究したという点で、演奏家による博士論文として、合格に値すると考える。

学位審査演奏会では、まずランベールのフランス語歌詞による数曲のエールをドゥーブルつきソロだけでなくヴァイオリン2本によるリトルネッロやソプラノとの2重唱もはさんで劇音楽のようにプログラムに変化をつけて演奏し、続いてテオルゴとガンバのみの伴奏でデュ・ビュイソン《ランベール氏への追悼》、最後にミントーンに調律されたイタリアンチェンバロのみの伴奏でランベール《聖金曜日の第3ルソン》が演奏された。声はよくコントロールされ十分に技巧的であるが、前半プログラムのメリスマの細かい動きが速過ぎて、歌の本質的な美しさが薄れてしまったことや、2重唱の響きの美しさを十分に伝えるにいたらなかったことが惜まれる。しかし後半の哀愁を帯びた旋律は内面的でかつ優雅で、フランス的な趣を漂わせた水準の高い演奏であった。論文・演奏を総合的に判断し、「(削除)」の成績で「合格」と評価した。